

まったく怪しげな哲学入門

学力研 先生のための学校 校長 久保 齋

人間は自分のためには頑張れない

言い訳ばかりしていますが、「大造じいさんとガン」に二週間もかかってしまった。それで、また題名とはまったく畑違いの卓球で原稿を書く羽目になってしまいました。でも、これが結構哲学的側面をもっているのです。この書籍の名前は『卓球王、水谷隼の勝利の法則』です。卓球はマイナーなスポーツと言われていましたが、リオデジヤネイロオリンピックでメダルを取ってちよつと有名になりましたし、今はかつてないほど、卓球スクールは子どもたちであふれています。その立役者が水谷隼なのです。彼は随分長いこと、卓球界では嫌われ者、ビッグマウス、異端児と言われていたのですが、この頃ようやく、日本でもその言動の本質が理解されだして、彼を通して、プロの意識や、練習と試合の関係や勝つこと

の教育的価値などが注目をあつめるようになってきたのです。そんな彼の言葉が、私の「愛することを教える」ということと合致しているので、引用させてもらいます。ぜひ、教育を考えるとときの参考にしてください。

彼は「試合で勝つための九十九の約束事」の九十九番目につきのようなことを書いています。

『勝者と敗者の違いは「他人のために頑張る」か「自分のために頑張る」かの違いだと思う。私は今まで自分のために頑張ってきたとは思っていない。常に他人のために頑張ってきた。自分のためだけなら頑張れない。』

自分のためにやっていると思つたら、厳しい練習、厳しい生活、厳しい試合には耐えられないし、乗り越えることはできない。

自分のためだけだったら「今日はこの辺でいいか」「ここまで苦しい練習をやらなくてもいいんじゃないか」と妥協してしまう。しかし、誰かのためなら頑張ることはできる。家族のために頑張るとか、身近の人のために頑張るなら、つらいことに耐えられる。自分を支えてくれる人のためだと思えば、ストイックになれるし、自分を追い込める。自分がまけて家族が悲しむ姿を見たくない、そのためにつらいことに耐えて頑張ろうと思う。自分は弱い人間だと思う。負けることで落ち込む。だから試合になったら勝ちたいと思う。もちろん、試合という勝負の中で自分は敗者ではなく、勝者になりたい。その勝者と敗者を分けている境界線は「誰のために頑張るのか」という点ではないかと思つている。

そして、スポーツの中で最も奥深くて難しいスポーツ、卓球を極めたいと思う。まるで登山家が命を懸けて世界の最高峰の頂点に立ちたいと思うように、自分も胸を張つて世界の卓球の頂点に立ちたいと思つている。日本という中では、私は圧倒的に「勝者」として君臨できているかもしれないが、

世界という大きな山の前では私は教え切れないほど「敗者」を味わっている。

いつの日か、私は世界の中で「勝者」になりたい。ラケットを置くまではその気持ちを保っていきたい。』

彼は卓球屋の息子で4才から卓球をしている。中学校二年のときに、単身、ドイツに渡り、ブンデスリーグというリーグで力をつけた。過酷な環境で、自分を追い詰めて練習し、試合をし、生活してきている。

そんな彼が言っている言葉として価値があると思う。「人は自分のためでは頑張れないのだ」「人のためと言った時に頑張れるのだ」

この間、講演で何べんもいつていますが、この点で日本の教育を間違っているのです。「何のために、勉強するのですか」と子どもに聞かれたとき、多くの教師が、「あなたのためよ。将来のあなたのためよ」と答えてしまう。これが現代の子どもたちをダメにしているのです。

軍国主義の時代は「お国のため」と多くの教師が答え、教え子を戦場の送ってしまったのです。

「自分のためでもなく」「お国のためでもなく」ではだれのためなのか。それは「他人

のためであり、人類のためであり、愛する人のため」なのです。そう言っただけで、子どもは頑張れないのです。それが、人間とは何かの哲学と結びついているのです。

豆太がなぜ、霜月二十日の晩に、霜で凍りついた峠道をはだして、半道も走って、医者様を呼びに行くことができたのか。それと同じことなのです。そんな真実を物語で教えながら、「勉強はなんのためにするのですか」と問われて時に、何の躊躇もなく、「自分のため」と答えていてはおかしくありませんかと思うのです。そんなこととしていたら、文学は文学、現実には現実ということになってしまっただけで、何のための「人格の完成をめざす」普通教育なの訳が分からなくなってしまうのです。

負けたことは子どもはバネにはならない

もう一つ水谷隼はいいことを言っているのです。

『負けたことはバネにはならない』

『勝つことで自信を得て卓球がおもしろく

なる』

『負けるには理由がある』

『勝つためには方法がある』

卓球のところを学習と置き換えて考えてください。私はよく「子どもは賢いから百点をとるのではない。百点を取らしてやると不思議と賢くなるのだ」と言っただけで、クラス挙げたの〇〇満点大作戦」を提案していましたが、私たち教師はクラス全員の子を勝たせ、自信をつけさせることが出来るのです。

悪い点数を取らしてがっかりさせたり、小言百連発で子どもの自尊心を傷つけてもそれはバネにはならないのです。負けてやる気を起こすなっただけではないのです。

勝った時の心地よさがやる気をおこさせる基なのです。

それは卓球も勉強も同じなのです。負けたらさっさと忘れて、勝つために頑張るんです。そして、勝った喜びをバネにまた頑張るのです。

最後にもう一度言わせてください。私たち教師はクラス全員の子を一度に勝たせることが出来るのです。これが教育のすばらしさなのです。